

瀧井孝作ノオト

—— 碧梧桐をむかえての高山での句会 ——

唐 井 清 六

「日本及日本人」に「日本の山水」を連載中の河東碧梧桐は、明治四十五年六月八日、飛驒の白川村取材のため高山を訪れる。それより三年前の四十二年七月、「続三千里」の旅の途中、单身立ち寄って以来の再訪であった。今回は門下の神戸の川西和露、青森の岩谷山梔子を同伴。

高山ではただちに福田鋤雲、瀧井折柴、小鳥良々、岩瀬菊字、川島桜南らが集まり、歓迎会がひらかれ、翌九、十日と料亭月波楼で句会が催されることになる。のちに高山で俳誌「ツチゲモ」をおこなす人たちである。

句会は、夏柳、朴の花、蚊の三つの席題のもとにおこなわれていく。次に掲げるものはそのときの記録であるが、句数はきめられず、各人任意に作句したもののようである。

瀧井孝作（折柴）はこの時十八歳、高山の魚問屋に奉公する少年であったが旺盛な句作を示し、互選においても碧梧桐につぐほどの高い点数を集めていることが注目される。

碧梧桐は高山に三泊して十一日に和露、山梔子を伴って徒歩で白

川に向かっている。碧梧桐はこのときのことを「白川越え」として同年七月一日号の「日本及日本人」に発表、句会の成果も十二句を選んで、大正元年九月号の「層雲」の「四方欄」に掲載している。

瀧井孝作の自伝長篇「俳人仲間」も当然このときのことにはふれるが、この資料にもとづいて執筆されたものではないようで、記録の語るものと「俳人仲間」との間にはかなりの異同と大幅な省略とが認められる。

翻刻に当っては、文字は大體現在使われているものに直したほか、理解の助けとなるよう人名など括弧によって適宜編者が補った。

発表をこころよくお許し下さった所蔵者の福田鏝三氏をはじめ、なにかとお力添え頂いた高山在住の大野政雄氏、小鷹奇龍子氏に厚くお礼を申し述べたい。

壬子六月九日

碧師来高紀念

於月波楼上

夏柳 作者選者共八名

七十句

湯返り途の小蛇むくろ夏柳岸

艶跡伝ふ葉柳廓夫住める

そのかみ斧磨ぎの岩鏡なくて夏柳

鹿羊馳駆して園丁の軽衣夏柳

娶るに葉柳影濃き日かな水祝ひ

舟に幌を島庁の旗日夏柳

大野昔路夏土取場柳陰

淵川の舟がひらく町や夏柳

雨の葉柳仰ぎ寒む袋蛇穴仕事

葉柳の啼あり江流岩多き

由来嗽や小半時夕立に此柳

二

門衛に家族ありて柯茂るなり

葉柳の鳥居筋酒肆に牡丹ある

襖組、子洗ぐ夏柳日表なる

江慣る頃髻磨ぐ日宿の葉柳に

葉柳や用水桶は役場より

舟運税国かはれば葉柳の河暑き

猷飼ふに窟造る家構夏柳

絶誦す晚唐名残り葉柳の詩句

一顆改刻語の奇に過ぐと葉柳書屋

鮎期迫る方柳の船茶讌にや

簀干すものに糖海老や葉柳の河岸

三

標榜の小京華葉柳に駕迎ふ日

流連両岸に葉柳文狂となり

道路教育の塗板迄葉柳に日いくつ

蚕の景気も葉柳に校舎普請あり

繙帯せし日の葉柳に黙談す

寺訪ふて留守を葉柳に虫飛べり

素人画相酬ふ鉞泉客夏柳

灣を思はず運河葉柳つゞく町

国境越えて凡な川葉柳の駅

葉柳の窯場見て一行と城山へ

葉柳の串魚の宿泊らで行くや

四

葉柳や貯水挽き墜す庫筈

稽古琴の根弛みを言ふ葉柳の長屋筋

葉柳の紙屋川羽白口鳥の雨

普請木を積む霖雨石も葉柳に

葉柳の旗亭にて硯乾かぬ日

同

桜南

同

鋤雲

同

桜南

同

鋤雲

同

良々

同

折柴

同

和露

良々

同

同

菊字

鋤雲

同

碧梧桐

良々

奈良の雨の葉柳に二信長きせり

同

五

健啖同窓葉柳に大鰻素焼きせり

肉声太きに夏柳短艇下る

葉柳に合歓咲く寺後廓道のあり

葉柳に栗匂ふ藪のおどろの夜

底萩原の運材酒場夏柳

茂柳が町城埋むと見つ平の家訪ふ

芝居丸つぶれを葉柳の釣堀さかる

濫褸市脱け来て葉柳に鶉鶏を見し

法書親しめば筆洗欲しき葉柳の荘

暮れの徜徉君と葉柳の杭州を

山漁具の弦しらべ葉柳折りて

足滑りも葉柳の網ひきずり魚市

桜南

和露

良々

碧梧桐

折柴

同

良々

鋤雲

桜南

同

折柴

同

六

簾葉柳宮島は杓子閑に雲無き日

酒楼にて対話聞え夏楊あらぶる日

葉柳に高桑や裸学校ある

後の竹枝の津の葉柳の売茶亭

濠の全景に船片寄する洲の夏柳

下呂は坂町上呂は橋の夏柳

広く掃く日の葉柳に書信待たずなり

或る日は穴居見に葉柳を画家とあり

折柴

同

碧梧桐

鋤雲

同

碧梧桐

良々

同

汐招き燕に櫓揃へ夏柳

植林の家葉柳は明き地物干場

葉柳に暮るゝ路地撒水車も捨てしに

折柴

同

菊字

七

何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉

葉柳に井桁見る一位細工所か

杉立つ山葉柳の池や里分つ

機場三年の儉もせし葉柳の埃

葉柳の狐雨瓦選り悩む

枿の齢も揣摩し来つ葉柳の宿

宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に

架橋兵風を打つ杭や夏柳

碧梧桐

和露

碧梧桐

和露

鋤雲

和露

碧梧桐

菊字

八

碧選

そのかみ斧磨ぎの岩鏡なくて夏柳

枿の樹齢も揣摩し来つ葉柳の宿

後の竹枝の津の葉柳の売茶亭

船に幌を島庁の旗日夏柳

葉柳の紙屋川羽白。鳥の雨

折柴

和露

鋤雲

折柴

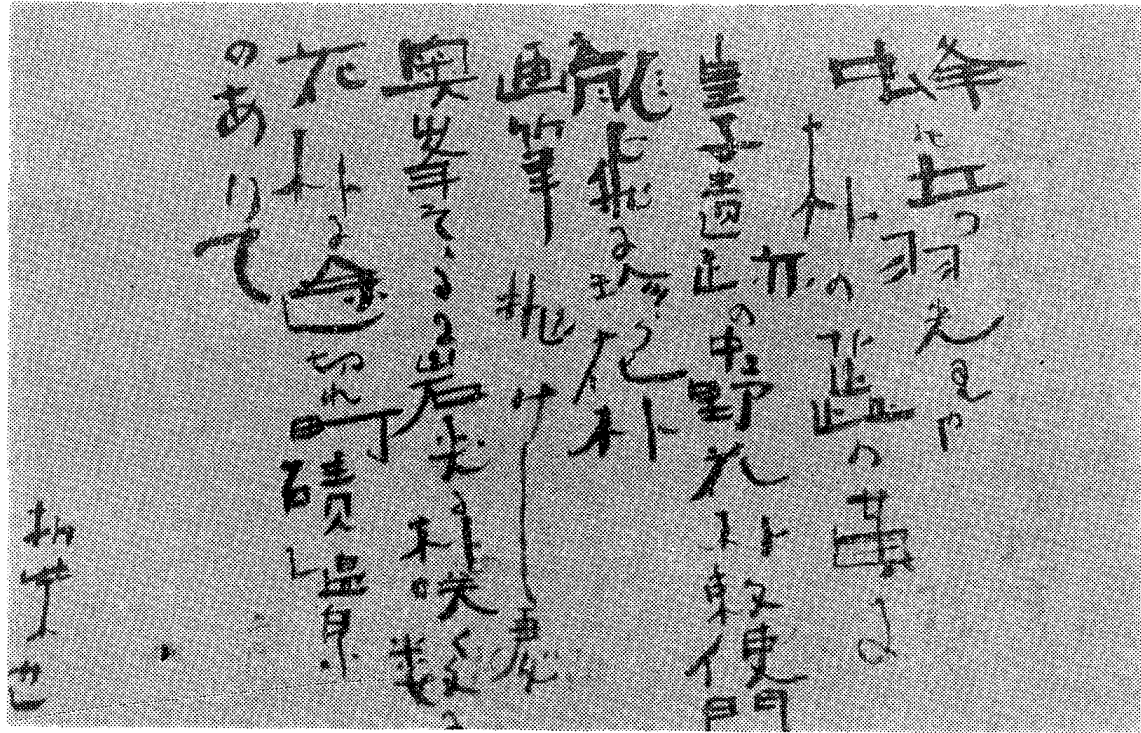
鋤雲

九

和露選

底萩原の運材酒場夏柳

折柴



何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉

碧梧桐

下呂は坂道上呂は橋の夏柳

同

宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に

同

葉柳に高桑や裸学校ある

同

十

鋤雲妄

架橋兵風を打つ杭や夏柳

菊 宇

葉柳に井桁見る一位細工所か

和 露

国境越えて凡な川葉柳の駅

同

下呂は坂道上呂は橋の夏柳

碧梧桐

奈良の雨の葉柳に二信長きせり

良 々

十一

(折柴選)

葉柳に栗匂ふ藪のおどろの夜

碧梧桐

濫褸市脱け来て葉柳にシャモを見し

鋤 雲

機場三年の儉もせし葉柳の埃

和 露

枿の齢も揣摩し来つはやなきの宿

同

宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に

碧梧桐

十二

良々選

底菰原の運材酒場夏柳

折 柴

何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉

碧梧桐

船に幌を島庁の旗日夏柳
 簾葉柳宮島は杓子閑と雲なき日
 汐招き燕に櫓揃へ夏柳

折柴
 同
 同

十三

桜南選

江慣る頃鬢磨ぐ日宿の葉柳に
 葉柳の串魚の宿泊らで行くや
 葉柳の旗亭に硯乾かぬ日
 底菘原の運材酒場夏柳
 杉立つ山葉柳の池や里分つ

菊字
 良々
 同
 折柴
 碧梧桐

十四

菊字妄選

底菘原の運材酒場夏柳
 広く掃く日の葉柳に書信待たずなり
 簾葉柳宮島は杓子閑に雲なき日
 宮茶屋に雨晴らす土偶が葉柳に
 船に幌を島庁の旗日夏柳

折柴
 良々
 折柴
 碧梧桐
 折柴

十五

もみぢ選

国境越えて凡な川葉柳の駅
 法書親しめば筆洗欲しき葉柳の荘
 濠の全景に船片寄する洲の夏柳

和露
 桜南
 鋤雲

杉立つ山葉柳の池や里分つ
 何煙らす葉柳に鯉を待つ昼餉

碧梧桐
 同

碧	折柴	もみぢ	良々	菊字	桜南	鋤雲	和露	
○			○	○			○○	鋤
○	○○ ○○							良
○○					○	○	○	も
○	○		○○	○				桜
○	○ ○○		○					菊
○○						○	○○	折
	○○					○○	○	碧
○○ ○○	○							和
12	11		4	2	1	4	6	

日本アルプスの雄姿ハ密雲

に閉ざゝれて仰ぐを得な

かつたけれ共田植唄聞ゆ

灘平ラの眺めは如何に

師の旅情をそゝった事だろう

六月十日

朴の花七十八句

作者選者とも九名

一
紙砧瀨面ラ響きや朴の花

舞台背景師が草汁しぼる朴花の山

山凶大略を飛ぶ鷲や朴の花そゝる

奥峰そゝるに岩尖る朴の咲く数に

茶渋る日名物甘き朴の花

蛇居らん糸滝の花朴に香が

朴の花すれに乗る番渡し牛は崖下へ

花朴に途切れ町積温泉のありて

二

味噌玉打つ雨に花朴くだちぬる

朴諸葉花もゆる滝は白水か

櫛材乾き跳ぬる岩罅朴の花照りに

馬の鈴鳴きの鳥ふくらみ音朴の花

一弁散り一弁朴のほぐれ行く

温泉谷魚を苞にせん朴花過ぎて

飛驒日光山裏滝なき花朴に

駕籠に堪えで花朴の坂清水汲む

疾足の師に尾して憩ふ遑花朴に

三

一瀬二平ラ朴咲きぬ釣魚香に立ちて

山さまでを花朴に飛ぶは雷鳥か

朴落花葉にひつくや家はてゝら壁

遠き花朴絶頂より連峰ほのに見ゆ

山石拾ふも規あるやに朴の花散れる

弁慶岩押して見る寺後朴咲けり

朴の花風の木賊洞鞍に鈴もせし

飛驒歩荷も雇ひ越す日の朴も咲ける

村名を神名に祢宜無き朴花の宮

四

朴の花やぬくみありなしの笥温泉浴ぶ

夜の飛驒京華朴の花坂に頌つ闇

蜂の立つ羽光りや朴の蓋の黄に

花朴の国境に海の見ゆところ

山賤が帰路背に薫る朴の花

合祠記念の桜まだ小さく朴は盛る香る

黒谷の花朴見しが今日は終宮

宮新道の砂利配置朴の花雨に

桜南

良々

鋤雲

折柴

鋤雲

同

折柴

同

(同)

良々

和露

(同)

桜南

折柴

(同)

碧梧桐

良々

(同)

鋤雲

折柴

和露

口山陽に平氏失せし山朴の花
剝製鳥は雨洗ひや宿朴散りて

折柴
同

五

棚田高尽くる処拓き余せる花朴にや

鋤雲

花朴に曇る橋場や奥は祭なる

良々

薪棚の数桁交り朴の咲く

碧梧桐

葦酒山門に入るを許さず幽邃の奥朴の花

和露

摘葉に梯子せり朴の花夕

同

高原女に咲くは朴の花桑摘む日

山梔子

朴の花も見ずなれば少し野広くて

同

朴の花の製材所下は瀬となりて

同

馬返しにて晴れ見定めつ朴の花

鋤雲

六

昔天領の門名残朴の花そゝる

鋤雲

柄と対して朴や花白ふ谷薫る

(同)

力士白真弓の里朴の太しきが咲く

折柴

寺訪ふて留守を花朴に蛇の昼

良々

花朴の峠下宮に俣捨つ

同

唄三昧のこの里に生立ちて朴花見たり

鋤雲

登山信者に花朴攀く御来迎やらん

同

朴花見んと松泰寺来て撮影もせり

和露

朴の花も散る干鞍の歩荷宿

同

七

砂金採る花朴に河鹿早き聞く

良々

皇子遺跡の中野花朴勅使門

鋤雲

氷室開くに朴の木谷の花蹴鳥

碧梧桐

朴の花に白映へり模範林やある

和露

白川御殿花朴の山垂れの庭

良々

麦埃家裏山にひとり花朴が

折柴

朴花薫る農山宿に見し彼の娘

同

碑の字俗悪を言ひ合へり朴の花散るに

鋤雲

兎角して地獄谷下りつ朴の香のつよき

同

そゝり立つ朴花白し飛驒の山茶屋に

同

花朴に鳥居ありて洞尺松明捨て場

折柴

近まさり花と知る朴に鳩啼いて

同

城は鬼柴田北の方住まれし朴の花

同

晒布の玉川跡へ花朴に来て

同

八

紀伊は高句ふ朴の花に梅仙の里

鋤雲

病婦にや朴咲ける家の夏炬燵

同

竜飛に珍ら花朴画筆抛げし処

同

峠茶店の青畳に話す朴の花

折柴

木場の博奕朴の花時を木地屋許る

菊字

花朴の香こもるに帰依仏を守る

鋤雲

行幸跡に斎く岩朴の花に来て

和露

朴の花の宿の茶は葉まがふ味

(同)

朴の花の加子母在麦は刈らずある
今も名の杖折り坂開山の朴咲ける

(同)
鋤雲

花朴に曇る橋場や奥は祭なる

良々

九

碧選

朴の花に白映へり模範林やある
高原女に咲くは朴の花桑摘む日
一瀬二平ヲ朴咲きぬ釣魚香に立ちて
朴の花も見ずなれば少し野広くて
近まさり朴と知る花に鳩ないて

和露
山梔子
鋤雲
山梔子
折柴

十二

良々選

宮新道の砂利配置朴の花雨に
口山陽に平氏失せし山朴の花
薪棚の数桁交り朴の咲く
朴の花も散る干鞍の歩荷宿
朴諸葉花もゆる滝は白水か

和露
折柴
碧梧桐
和露
鋤雲

十

折柴選

蜂の立つ羽光りや朴の蓋の黄に
皇子遺跡の中野花朴勅使門
竜飛に珍ら花朴画筆抛げし処
奥峰そるるに岩尖る朴の咲く数に
花朴に途切れ町積温泉のありて

碧梧桐
鋤雲
同
碧梧桐
良々

十三

鋤雲妄

花朴の国境に海の見ゆ処
一弁散り一弁朴のほぐれ行く
黒谷の花朴見しが今日は終宮
蜂の立つ羽光りや朴の蓋の黄に
花朴に途切れ町積温泉のありて

良々
碧梧桐
折柴
碧梧桐
良々

十一

菊字妄選

朴の花風の木賊洞鞍に鈴もせし
氷室開くに朴の木谷の花蹴鳥
白は鬼柴田北の方生まれし朴の花
紀伊は高匂ふ朴の花に梅仙の里

和露
碧梧桐
折柴
鋤雲

十四

桜南妄選

今も名の杖折り坂開山の朴咲ける
奥峰そるるに岩尖る朴の咲く数に
櫛材乾きはぬる岩笹朴の花照りに
蜂の立つ羽光りや朴の蓋の黄に
黒谷の花朴見しが今日は終宮

鋤雲
碧梧桐
菊字
碧梧桐
折柴

十五

梶選

朴の花やぬくみありなしの笕温泉浴ぶ
 一ト瀬二タ平朴咲きぬ釣魚香に立ちて
 登山信者に花朴さゝぐ御来迎やらむ
 花朴に鳥居ありて洞見松明捨て場
 山図大略を飛ぶ鷲や朴の花そゝる

折柴 鋤雲 同 折柴 鋤雲

十六

もみぢ選

病婦岩朴咲ける家の夏炬燵
 今も名の杖折り坂開山の朴咲ける
 一弁散り一弁朴のほぐれ行く
 高原女にさくは朴の花桑摘む日
 村名を神名に祢宜なき朴花の宮

鋤雲 同 碧梧桐 山梶子 桜南

十七

和露セン

山図大略を飛ぶ鷲や朴の花そゝる
 花朴に鳥居あり洞見松明捨て場
 奥峰そゝるに岩尖る朴の咲く数に
 薪棚の数桁交り朴の咲く
 蜂の立つ羽光りや朴の蕊の黄に

鋤雲 折柴 碧梧桐 同 同

碧	山梶子	折柴	菊字	良々	鋤雲	桜南	もみぢ	和露	
	〇〇	〇			〇			〇	碧師
		〇〇			〇〇〇				梶
〇〇				〇	〇〇				折
〇		〇			〇			〇〇	良
〇〇		〇		〇〇					鋤
〇〇		〇	〇		〇				桜
〇	〇				〇〇	〇			も
〇〇〇		〇			〇				和
〇		〇		〇	〇			〇	菊
12	3	8	1	4	12	1		4	

壬子六月

碧師来高紀念

於月波楼上

蚊 作者選者共九名

二十八句

逗留強ゆに蚊少きを脱稿の宿

蚊なきめで、馬賞得し祝酒酌みかはす

蚊に逃げし旅に又山あぶの苦をなめつ

蚊の諸音夕ハタと掛物煽りして

蚊の宿の葉蕪漬に色あらぬ

国分寺塔仰ぐ山椒畑の蚊に

蚊に堪へて選鉢に洗ふ光る物

温突に酔ひしが草床の蚊の夏に

蚊無ければ話し更くる登山合宿所

須磨は体重に診る病や蚊の稍々に鳴く

おどろ角子の蚊柱の灸師許訪へり

蚊を焼いて壁の目紙を破き張りに

夜間写真師の鉢山住マひ雨漏り畳の蚊

棋は許れど扈従の間蚊火乏しらに

国宝拝觀昼の蚊の廊下を尾して

白木天井座敷にも飛驒の昼蚊飛ぶ

送る名をつい同行蚊払ひ雨風の日

蚊鳴くにも今日の大瀑うつゝ聞く

鋤雲

(同)

(同)

折柴

良々

和露

碧梧桐

折柴

鋤雲

菊字

鋤雲

良々

菊字

鋤雲

良々

折柴

同

鋤雲

二

庭木二に月も欲し椽に蚊雷す

懊悩のうちに尚生くと蚊の出しも知らず

家を分つに集りて藪蚊繁き夕

休職後を私宅住ひ蚊の殖えし覚ゆ

経木屑の蚊柱や何の型か干す

酒さむる頃銀屏に蚊はたきて

臨末御書拝読す宿は蚊の夕

古川在の田舟渡しや群る藪蚊

桑高木枝交ゆ昼蚊さす所

蚊に襲はる手枕も逢ふべかりし夜

鋤雲

山梔子

良々

鋤雲

和露

同

山梔子

折柴

山梔子

同

三

碧選

蚊は宿の芽蕪漬に色あらぬ

蚊鳴くにもけふの大滝うつゝきく

もみぢ選

蚊に襲はる手枕も逢ふ可かりし夜

懊悩のうちに尚生くも蚊の出しを知らず

菊字妄選

庭不二に月も欲し椽に蚊雷す

桑高木枝交ゆ昼蚊さす所

良々

鋤雲

山梔子

同

鋤雲

山梔子

桜南選

温突に酔ひしが草床の蚊の夏に
棋は許れず扈従の間蚊火乏しらに

折柴
鋤雲

良々選

蚊に堪へて選鋤に洗ふ光る物
白木天井座敷にも飛驒の昼蚊飛ぶ

碧梧桐
折柴

折柴選

桑高木枝交ゆ昼蚊さす所
蚊の宿の芽蕪漬に色あらぬ

山梔子
良々

鋤雲選

蚊に襲はる手枕も逢ふべかりし夜
家を分つに集りてやぶ蚊さす夕

山梔子
良々

和露選

国宝拜觀昼の蚊の廊下を尾して
蚊の宿の芽蕪漬に色あらぬ

良々
同

山梔子選

国宝拜觀昼の蚊の廊下を尾して
休職後の私宅住ひ蚊の殖えし覚ゆ

良々
鋤雲

碧	山梔子	折柴	もみぢ	良々	菊字	桜南	鋤雲	和露	
				○			○		碧
				○			○		梔
	○			○					折
	○○								もみ
○		○							良
	○						○		菊
		○					○		桜
	○			○					鋤
				○○					和
1	5	2		6			4		